



大富農産のワサビハウスの後ろを流れる「荷口川」の源泉。湧き出た地下水が源流になっている。

山形が大嫌いだ。一刻も早くここから抜け出したい、と高校卒業後は東京にある服飾の学校に進学した。昼間は学校に通い、夜は新宿のショーパブで舞台衣装を作るアルバイトをした。夜9時に開演するショーに合わせて出勤し、夜通し働いてそのまま学校に行った。とにかく手を動かしているのが楽しくて、文字通り「寝食を忘れて」没頭した。楽屋の隅のミシンの前や移動の電車でわずかな睡眠をとり、家のベッドで寝たことがなかった。食べることは二の次で、アルバイトで出されるまかないだけでいいでいた。

卒業後はすぐに独立して代官山にお店を構えた。生活はますます多忙を極め、当時のことはよく思い出せないほどだ。山形に住む両親からは体調を心配して野菜やお米が届いたが、段ボールは何日も開けられずにそのままになっていた。お米を炊く時間さえも惜しく、食事は簡単に食べられるパンばかり。一日中何も口にしないことさえあった。当初は口コミで順調にお客さん

を増やしたが、ファストファッションの流行とともに売り上げが減少。高額な家賃も経営を圧迫し、オープンから2年を待たずして店をたたんだ。その後は2年間ほど、アメリカ、カナダ、タイ、カンボジアなど、さまざまな国や地域を旅して回った。

帰国後、佳菜子さんはオーガニックコットンの布製品を作る会社に入った。その会社の布ナプキンを使ったところ、ひどい生理痛がたちまちに緩和され「これはすごい！」と感動したのがきっかけだった。入社早々、カンボジアの地雷原を綿畑に変える活動をしている日本のNPO法人と連携し、その綿花で商品を作るプロジェクトの担当になった。旅行でカンボジアの首都には行ったことはあったが、地雷の話など聞いたこともなかった。佳菜子さんは織物の織り方を教えるために現地へ向かった。目的地は首都からバスで5〜6時間かかる、タイ



1.「大富農産」でワサビを栽培する佐藤佳菜子さん。2.大富地区では約20%にあたる300世帯が地下水を使って生活している。庭先の水場を見せてくれた岡田久善さん。3.大富地区を流れる川には絶滅危惧種に認定されている淡水魚「イバラトミヨ」が生息する。

佐藤佳菜子さん(39)は愛娘を学校に送り出し、みんなが出勤する30分前に農場にやってくる。柔らかな風が肌を撫でる。胸いっぱい息を吸い込むと、土の香りが鼻腔をくすぐる。「あ、春の匂いがしてきたな」。聞こえづらくなった左耳の代わりに、右耳にすべての意識を集中させる。ピョロピョロ……とのびやかにさえずるトンビの声が聞こえる。ビニールハウスの横を流れる小川を見やると、岸辺にサギの赤ちゃんがいる。「こういう時間が私には必要だったんです」と言いつ、佳菜子さんはふわりと微笑んだ。

#### ファッションデザイナー

佳菜子さんは神奈川県に生まれ育った。中学生のころに父の仕事の都合で山形県東根(ひがしね)市へ越してきたが、言葉の違いが苦しかった。みんなが言っていることがよく分からなかったし、関東弁で話す「ツンツンしている」と怪訝な顔をされた。学校に行くのが億劫で、